



コロナ禍におけるダンス・ワークショップの活動とその意義：地域連携事業『みんなで踊ろう』を事例として

その他のタイトル	The Meaning of Inclusive Dance amidst the Spread of COVID-19 : A Case Study of the "Dance for Everyone" Workshop
著者	眺野 花, 原田 純子
雑誌名	人間健康学研究 : Journal for the study of health and well-being
巻	14
ページ	83-93
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.32286/00023079

コロナ禍におけるダンス・ワークショップの活動とその意義 ——地域連携事業『みんなで踊ろう』を事例として——

眺野 花・原田 純子

抄録

本稿では、外出自粛期間における非対面型活動と、対面による短い活動期間の結果として実施した舞台公演が、参加者（高齢者と学生）にとってどのような意味を持っていたかについて質問紙調査をもとに検討した。

『みんなで踊ろう』は、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、対面での活動をおよそ半年間休止していたが、その間学生から高齢者（シニア）に向けてダンス動画の配信や手紙の送付、LINEでのやりとりなど、非対面型での活動を続けていた。この非対面型の活動は、シニアに概ね好意的に受け容れられており、多くのシニアが配信動画により身体を動かし、メッセージのやり取りによって他者とつながりを感じ、それを喜びとしていたことが明らかとなった。

後の対面での活動では、シニアの多くは感染症に対する不安を示していなかったが、学生の半数は、自分が無症状感染者でシニアに感染させてしまうのではないかと不安を抱いていた。活動自粛期間において非対面型の活動を発信し続けたことに対する結果は、参加者同士のこれまでの関係性の基盤をより強固なものにし、後の対面での活動において大きな信頼となってシニアの不安を打ち消すことにつながったであろうことを示唆している。

活動自粛の間に溜まっていたストレスや不安が舞台発表という身体を使った表現によって昇華し、それが他者（家族や観客）によって共感・共有され認められたという経験は、シニアと学生の承認欲求を満たし、自信を導くものであったと言える。

キーワード：ダンス、高齢者、舞台公演、非対面型活動、コロナ禍

1. はじめに

“みんなで踊ろう”ダンス・ワークショップは堺市×関西大学の地域連携事業として、2010年より筆者（原田）が主催して始まった。参加者は堺市に在住する平均年齢およそ70歳の高齢者¹⁾約30名と、高齢者をサポートする学生約10名であり、ダンスを通じた交流と創造的で自由な表現の「場」としてワークが展開されている。開始当初は単発のワークショップであったが、継続して参加を希望する人が次第に増え、参加者らが自己の表現に自信を持つようになったことから、2017年からは毎年成果発表として舞台公演を開催している。2019年の公演後に行った参加者へのインタビューからは、舞台公演は参加した高齢者にとって、自己治癒の手段として作品に取り組みむ機会であったり、仲間意識を強めたり、承認欲求を満たしたりする可能性のあることが明らかにな

った。（原田, 2020b）。

今年度は新型コロナウイルスの流行による緊急事態宣言や外出自粛要請などから、計画通りに活動することができず、練習期間が短いことや、感染症が流行する中で学生が重症化リスクの高い高齢者と共に活動することなどが懸念された。感染者の増加に伴い直前の中止もあり得るという今までにない不安な状況であったが、感染防止対策を万全にし、舞台公演を開催（2020年11月5日）することができた。

2. 2020年コロナ禍における“みんなで踊ろう”の概要

2-1. 実施概要

2020年度の「みんなで踊ろう」の活動概要は表1の通りである。

例年は前期と後期で10回ずつ対面型のワークを行

表1 2020年度「みんなで踊ろう」の活動概要

	前期	後期
期日	2020年4月～8月	2020年9月～2021年1月
活動形式	非対面型	対面型（一部非対面型）
活動内容	動画の配信 メッセージ・手紙の送付	公演に向けての練習 舞台公演（11月5日）
参加者数	シニア 27名 サポート学生 10名	シニア 27名 サポート学生 11名

なっていたが、今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大によって、前期は対面での実施ができなかったため、動画の配信や手紙の送付を行った。緊急事態宣言解除後、感染者が一時的に低減した7月11日（土）に、様々な感染対策をしながら、2020年度初のワークを行なった。参加者の中には「まともに人と面と向かって話したのは4ヶ月ぶりだから、みんなと会えて嬉しい」という独居の人や、「ずっと夫と2人で家にいると悶々としてきていたので、発散できてよかった」²⁾と言う女性もあり、月2回とはいえ、参加者にとって『みんなで踊ろう』は身体的な健康のためだけではなく、仲間との交流やリフレッシュの機会になっていることを再認識した。しかし、その後また感染者数が急増し、前期の対面でのワークはこの時の1回きりとなった。

後期のワークは9月12日（土）から始まった。この日、11月5日に舞台公演をすることが参加者に初めて伝えられた。あわせて、「このようなご時世なので、無理に出演しなくていい。家族と相談して決めて欲しい」とも言い添えたが、全員が出演することを選択し、9月26日から舞台公演に向けての練習がスタートした。2019年度の公演は準備期間が半年であったのに対し、今年度（2020年）はわずか40日間であった。さらに、学内での感染に伴い活動自粛要請が出た日もあり、練習日は8回程度であったが、即興的な要素を多く取り入れた構成にすることで作品を創り、多くの人の支えによって、11月5日に無事舞台公演を開催することができた。

その後、国内は再び感染者が急増し、大阪府は12月3日に医療非常事態（レッドゾーン）を宣言した。不要不急の外出自粛要請が出たため、12月は再度ワークが中止となった。

2-2. 非対面型活動の内容

不要不急の外出は控えるよう要請が出ている中、ワークも開催できずにいると、運動不足になる参加者も出てくるであろうと考えた筆者らは、自宅で簡単にできるダンス動画を撮影し、コミュニケーションアプリ「LINE」のグループを用いて参加者へ配信することを企画した。「花ちゃんと踊ろう」と名付けたその動画をシリーズ化し、第1弾を4月3日に配信した。その後、参加者の自宅での生活を想像しながら、「肩周りをほぐそう」や「背中を伸ばそう」など毎回テーマを決め、高齢者に馴染みがあり、長すぎず、しかし、“動いた”と感じられる3～4分の曲に合わせてダンスを創り配信した。ワークを受けているような気持ちになってもらえるよう、動画にはサポート学生が代わる代わる出演し、動きに合わせて録音した筆者（原田）の声を入れた。参加者は動画を配信するたびに、「この曲すごく好きだから嬉しい!」、「久しぶりに汗をかいた。コロナをやっつけるためにからだを動かします」、「先生のかけ声を聴きながら楽しく踊っています」、「私は今回のやつが1番好き!」などの感想をLINEメッセージとして投稿していた³⁾。また、昼間に預かっている孫とできるダンスをして欲しいというリクエストなどもあ



写真1 配信動画「花ちゃんと踊ろう」の例

表2 配信動画「花ちゃんと踊ろう」の概要

配信日	テーマ
4月3日	“花は咲く”を踊ろう
4月6日	床でストレッチ
4月9日	タオルを使ってストレッチ
4月14日	肩周りをほぐそう
4月19日	脚を動かそう
4月28日	お孫さんと踊ろう
5月6日	背中を伸ばそう
5月11日	みんなで歩こう
5月23日	表情筋を鍛えよう
6月2日	からだを脳を動かそう
6月22日	おそうじで踊ろう

り、それに応えたダンスも作成した。「花ちゃんと踊ろう」の概要は表2の通りである。

「みんなで踊ろう」に参加している高齢者のスマートフォン保有率、つまり配信した動画を見ることができるのは参加者の7割程度であった。残りの3割の人には学生からの手紙と、自宅のできるストレッチのイラストを描いたプリントを送付した(資料1)。受け取った参加者は、自宅の壁に貼ったり、友人や親戚にコピーして配ったりして活用したとの報告を受けた。

また、ワークがない期間に参加者同士で、電話などで連絡をとっていたという人は25名中21名いたことが、参加者への質問紙調査(後述)で分かった。

2-3. 対面でのワークショップ

2-1でも述べたように、前期の対面でのワークは7月11日のみであった。その日の流れは表3の通り

である。

後期の公演に向けての練習は、9月12日から計8回実施した。2017・2018年に行われた第1・2回目の公演は、参加者を3つのグループに分け、サポート学生がリーダーとなり、振り付けや構成を考えていたが、昨年(2019年)はグループを6つに分け、学生と高齢者が協力し合って創作する形に発展していた。

今年度はさらに高齢者の表現と主体性を高めるよう展開したいと考えていたが、練習回数の確保が難しかったため、“即興的な動き”と、“パターンの決まった振り付け”のみで全体を構成した。パターンの決まった振り付けは、手本の動画をLINEで配信し、シニアが自宅でも確認できるよう工夫した。

また、例年はメインの群舞作品のほかに、シニアの小作品(有志のみ参加)も発表していたが、今回は練習時間の都合で無しとした。



資料1 送付したプリント

表3 7月11日のワークの流れ

9:00~	サポート学生集合 ヨガマット20枚をアルコール除菌し、距離をとって敷く
9:30~	アリーナで受付(検温して、名簿に記入) (参加人数:シニア24名、学生7名) 参加者をA(眺野担当)とB(原田担当)のグループに分ける
10:00~	Aは教室で花ちゃんと踊ろう他を実施 Bはアリーナでダンス踊ろう他を実施 ヨガマットと教室の机・椅子を除菌
11:10~	Bは教室で花ちゃんと踊ろう他を実施 Aはアリーナでダンス踊ろう他を実施
12:10	シニア解散 学生はヨガマットと教室・椅子を除菌

表4 ワークの内容

○教室でのワークの内容 (眺野担当)
・ 自粛期間の出来事や過ごし方などを1人ずつ発表 ・ 学生が踊りを繋いで作成した動画を鑑賞 ・ 「花ちゃんと踊ろう」を全員で実施
○アリーナでのワークの内容 (原田担当)
・ 身体ほぐし ・ ヨガマットの正方形や縁を利用した表現遊び ・ 風を送る表現 (カノン) 他

表5 2020年公演概要

公演の趣旨	関西大学人間健康学部創設 & ダンス・ワークショップ10年記念事業 第4回“みんなで踊ろう”ダンス・パフォーマンス
タイトル	君と〈with コロナ〉2020 — 私たちの実験舞台 —
日時	11月5日(木) 17時30分開演
場所	フェニーチェ堺 大ホール
出演者数	シニア28名 学生51名 (うち40名はオープニングのみ出演)
観客数	およそ250名

2-4. 公演概要

公演の概要は表5の通りである。

2-5. 上演作品について

舞踊作品を創作する際、同時代性を考える、つまり現代において起こっていることをそれぞれの感性で捉えてテーマに据えることは重要なことの一つであると考え。同時代のテーマは、演じる者にとっては実感として捉えやすく、観る者には共感を覚えやすい。その意味で、今回の作品のテーマは新型コロナウイルス感染症以外にないと考え、表6に示す内容で構成した。シニアが登場するのはシーン1・3・6・7・8であった。

上演については、舞台での見栄えや出演者の息苦しさを考え、本番だけマスクを外して踊る予定であったが、たとえ舞台上であったとしても学生と高齢者がマスクなしで関わるのは感染リスクが高いと考え、共に踊る本作品は本番もマスクを着用して臨んだ。マスク着用による上演でも、出演者にとくに身体的な問題はなく、当日の観客アンケートにも、「お揃いのマスクが衣装と馴染んで良かった」、「マスクがwithコロナを連想させる良い演出だった」等、



写真2 教室でのワークの様子



写真3 アリーナでのワークの様子

マスク着用を好意的に受け止める感想が多かった。

3. 研究の目的および方法

3-1. 研究の目的および調査の方法

本研究の目的は、緊急事態宣言下の外出自粛期間における非対面型活動と、対面による短い活動期間の結果としての舞台が、参加者にとってどのような意味を持っていたかを明らかにすることである。シニアには公演終演後(11月5日)に質問紙を配布し、11月14日の練習日までに無記名式で25名から回収した。シニアの平均年齢は、およそ68.6歳である(無記入1名あり)。サポート学生にはウェブによる質問調査を実施し、10名から回収した。学生の平均年齢は20.9歳であった。

3-2. 調査項目について

質問紙調査の質問項目は以下の表7の通りである。問1~4はシニアのみ、問5~9はシニアとサポート学生に共通の質問をした。

4. 結果と考察

シニアに対する質問紙調査と、サポート学生に対

表6 創作作品『君と〈with コロナ〉2020』（2020.11.5 上演）の構成と内容

作品解説（テーマ）		これまで想像もしなかった君（コロナ）との生活。 私たちの周りには新しい問題がたくさん生まれてきて、結構不自由も多いけれど、ともに歩もう、今は。
シーン 1	情報に戸惑う	「横浜港のクルーズ船で新型コロナウイルスが…」というニュースを読むアナウンサーの音声が始まる。徐々に重複していくニュースの音声と新聞を持って走り回る人、新聞紙に動かされる人々から、突然入り込んできた感染症に関する多くの情報に振り回され、戸惑う 2020 年 2 月頃の社会を即興的な表現で構成した。
シーン 2	距離をとれ！	「ソーシャル・ディスタンス」という言葉が登場し、人との距離を意識し始めた緊張感を、バトンを用いた動きと時計の針音の曲を用いて表現。学生のみシーン。
シーン 3	従うは善？	突如始まった自粛生活における様々な制約。世界中の誰もが予測不可能な事態に、誰の言うことを信じれば良いのか、このまま従って良いのか不安が募る。一つのパターンの振りをカノンで動くことでずらし、機械的に周りと同じ動きを続けながらも、どこかモヤモヤした感情を持つ様を、一部即興表現を入れながら表現。
シーン 4	挽く（もがく）	会いたい人に会えない、行きたいところに行けない一次第に強く長期になっていく制約に対して、ストレスが溜まり、葛藤する様子を男性 2 人が力強い動きで表現。
シーン 5	密を避ける	「密」や「ソーシャル・ディスタンス」という人との距離を表す言葉に敏感になる人々。自身のパーソナルスペースを守ることに必死で、くしゃみをしただけで「コロナ!？」と逃げ惑い、人を避け合う現代の社会風景を学生のみで表現。
シーン 6	大切なもの	孤立し閉じこもる若者に対して、人生の先輩である高齢者が「大丈夫よ」と伝える。赤い糸電話で、細くても確実にあるつながりを表現。希望を見出す姿をシニアと学生が 2 人で踊った。
シーン 7	とれない距離もある	障がいがある人や高齢者には、コロナ禍においても身体的接触を含む支えが必要な場合があることを、車椅子に乗る障がいがある男性と要支援のシニアが学生と共に表現。
シーン 8	あたらしい日常	これまで考えもしなかった新たな生活様式。時には辛く、不便なこともあるが、これを日常を皆でともに受け入れ、進んでいこうという希望を、明るく柔らかな音楽に合わせ、出演者全員で表現。即興と一部振付けのある動きで構成。

表7 質問紙調査の質問項目

問1	シニアのみ	自粛期間中、あなたにとって「みんなで踊ろう」の存在とは
問2		活動休止期間に学生から届いた LINE や手紙について感じたこと
問3		活動休止期間の学生以外のメンバーとの連絡について
問4		「花ちゃんと踊ろう」の活用頻度
問5	シニア・学生共通	対面でのワークショップ（WS）に対する不安
問6		公演開催について
問7		公演練習中の不安について
問8		公演に出演したことに対する意義
問9		公演に出演した感想

するウェブ調査の結果を以下に述べる。

（「 」の記述は、回答者の意見をそのまま記述した。（ ）内の数字は、同様の意見を記述した人の数を示す。）

まず、シニアにとって『みんなで踊ろう』がどのような存在として意識されているかを問うた【問1】については、「心にぽっかり穴が空いた状態でした。『みんなで踊ろう』が私の中では大きな存在だったなあと痛感しました」、「私たちにとっても大事なも

の」(4) と考え、「早く始まって欲しい」(3)「早く皆に会いたい」(2) というように、シニアの日常にとっては身体を動かす貴重な場であることが分かった。活動休止については、「『みんなで踊ろう』も社会的組織の一つであるので、自粛は当然であるだろうという思い」がある一方で、「自分の生活の一部なので、なくては困る」と述べていた。また、「みんなと一緒だから身体を動かすのが楽しいのだと改めて自覚」、「定期的に若い学生さん又同世代の高齢者と

共に全身の筋肉と頭脳を働かせることが大変大切なことと判った」等の記述にあるように、シニアと学生が一緒に行くことが重要と認識されていた。

4-1. 非対面・対面による活動について

【問2】「活動休止期間に学生から届いたLINEや手紙について」は、「仕事も楽しいことも自粛中、学生の皆さんからのラインは楽しみでした。皆さんの優しさ感謝」「優しくこんな私たちのことを思ってくれていることに愛をとっても感じて、感謝、感謝の気持ちでいっぱい」(8)という感謝の気持ちや、手紙やLINEのメッセージに「元気をもらった」(3)、「嬉しかった」(3)、「勇気づけられた」(2)、「励まされた」(2)という記述が多く、学生からのメッセージは、シニアに好意的に受け止められていたことが分かった。また、学生や仲間からの「LINEが楽しみだった」(6)、「思ってもいなかったLINEの活用に今の時代を感じました」(2)と、今の時代に即したやりとりに感心と楽しみを示し、そのことによって「つながりを感じ、つながることが喜びとなっていた。鯨岡(1997)は、われわれ人間がもつ“他者と繋がって安心を得たい”という欲求を「繋合希求性」と呼び、人間は本源的に他者と繋がること・共にあることに喜びを感じると説いた。この問いに対する回答には、まさにこの「繋合希求性」を読み取ることができるであろう。

【問3】「活動休止期間の学生以外のメンバー(シニア同士)のやりとり」(N=25)については、80%(20名)が「(他のメンバーと)連絡を取り合った」と回答しており、活動で直接会うことがなくても、多くが連絡を取り合い、互いの状況を確認めあっていたことが分かる。

【問4】「『花ちゃんと踊ろう』の活用頻度」(LINE活用者のみ/N=15)については、「何度も(ほぼ毎日)やった」が6名、「時々やった」が7名、「配信時に1回のみ」が1名、「その他」(期間途中からLINEを使用)が1名であり、LINEを活用している人の9割近くが配信動画『花ちゃんと踊ろう』によって身体を動かしていたことが分かった。

【問5】「対面でのワークショップに対する不安」については、「どのような方法で再開するのかとか、全員でもいいのかとか不安でした。しかしマット

の上で体操し、換気もして、全く不安なくできました」という記述に見られるように、シニア(N=25)は約9割(23名)の人が「不安はない」と回答した。その一方で、学生(N=10)は、「自分が無症状で(新型コロナウイルスに)感染していないか、それを高齢者にうつさないか不安だった」というように、半数(5名)が「少し不安があった」と答えていた。

4-2. 公演への出演について

【問6】「公演の開催」については、「絶対に出演したい」がシニア(N=25)で12人、学生(N=10)で7人、「皆が出るなら出演したい」はシニアでは12人、学生で3人と、短い練習期間にもかかわらず、ほぼ全員が公演の開催を肯定的に受け止めていた。

その理由は、「ワークショップが再開されただけでもありがたいのに、公演を開催するに伴う元気(目標・希望)をもらえて嬉しかった」、「フェニーチェという所が魅力的でした。コロナの中での公演を観て欲しいと思った」、「何か行動をしないと、前途が光が見えないと心配だったので、大変救われた目標でした」、「コロナのことは気になるが、みんなで気をつけて頑張れば大丈夫だと思った。開催することを知り、喜びで胸一杯になった」と、シニアには大変肯定的に捉えられており、公演が大きな目標や希望となっていた。学生においても、「今、コロナ渦で舞台公演が無くなっている中で学生だけではなく、高齢者とともに舞台に立つことは大変意味のあることだと考えた」、「純粋にみんなと舞台上で踊りたかった」(4)「この時期に舞台上に立つことで、観に来てくださる方などに、少しでも元気や希望を届けられたら良いなと思った」と、一人ではなく皆でやることに期待と意義を感じている学生が多いことが分かった。

【問7】「公演練習中の不安」については、25人中22人が「ほとんど不安はなかった」と答えたのに対して、学生は「ワークショップ内ではできる範囲の感染症対策をしていたが、ウイルスをいつどこから持ち込んでしまうか分からなかった」、「コロナの(感染)リスクが高くなる高齢者と接する機会が多かった」という理由で10人中6人が、「不安であった」と回答していた。感染対策をしているとはいえ、学生から高齢者への感染という事態は絶対に避けなけ

ればならない重要事項であった。その意味で、学生に対しては日常の生活から行動に気をつけ、感染対策を怠ることがないよう伝えていた。

【問5・6・7】の結果から、シニアよりサポート学生の方がコロナ禍の活動に対して不安を抱いており、自身が気付かぬうちにシニアにコロナウイルスを感染させてしまうのではないかと危惧している状況を読み取ることができた。一方で、このような気持ちを持ち続け、感染対策を徹底的に意識していた学生の言動が、シニアの不安解消に繋がり、公演への全員参加という結果を導いたとも考えられる。

【問8】「公演に出演したことに対する意義」については、シニア、学生共に全ての出演者が「意義を感じた」と答えていた。その理由として、シニアでは、「感染症対策を万全に行うことは難しく、リスクを避けて、イベントが中止が当たり前になる中で、あえて公演を決行するのは、勇気のいることです。一人一人コロナを意識しながら行動し、発表できたのは自信につながりました」、「コロナ禍の中、閉塞感がありましたが、公演のために練習することで励みになりました」、「コロナから逃げているばかりでなく、今後のwithコロナを実践していくためにどのようなことをすればいいのかを考えるきっかけになったと思います」と、自身にとって意義があったと述べた人(12)、「コロナ禍でも「私は踊りたいねん」という思いや、コロナや社会に対する思いも表現できたと思う。コロナ禍での閉塞感やwithコロナでも生き生きと生きていこうというメッセージは届けられたと思う」、「高齢者でも元気にダンスを楽しんで実施していることで、見学に来ていただいた方々にも勇気を与えられるなら良いことと感じました」と、自身が踊る姿を観てもらうことでメッセージや勇気を届けることができたという点で意義を感じた人(8)が見られた。さらに、「公演に向け、スタッフの人たちの努力があり、出演者たちの絆が深まったのでは」、「つながりが希薄になっている中、今回の公演を通して人と人との温かいつながりを感じました。私自身もまわりの方々に力を惜しまず、あたたかい気持ちで接していきたい」とつながりが深まったことに言及していた人(2)がいた。学生においても同じく、「公演に向かってみんなで取り組むことが出来、生活にもメリハリが出来たように感じた」、「コロナで様々

なことが制限される中、このように無事に舞台でみんなで踊れたことは、この暗いコロナ禍でも希望を感じることができた」と自分自身における意義を見出した者(5)、「見に来てくれた人が感動したと言ってくれて、お客さんを入れて公演を行った意義があったと感じた。舞台は、演者と観客とのコミュニケーションであることを強く意識させてくれた」、「コロナが流行っているから、何もかも全部できない」と、最初から諦めるのではなく、ありとあらゆる感染対策を徹底しながら、少しの可能性でも挑戦してみることが大事だということが、自分でも改めて実感できたし、出演者はもちろん、その周りの人やお客さんにもそれが伝わったのではないかと思った」と、コロナ禍であっても表現してメッセージを伝えること、挑戦することの大切さを認識した(4)という記述が見られた。

【問9】「公演に出演した感想」についてのシニアの記述を以下に挙げる。「今までにない大きな舞台、フェニーチェの舞台でできたこと、自慢です。時間が少ない中、みんなの気持ちがギュッとまとまった感じがあります。会ってる時間が大事ということが分かってるんですね。みんなと一緒にできてよかったです」、「とても素敵なホールで踊れるのでワクワクしていましたが、袖に入ると緊張してしまいました。舞台で自身を解放してしまうと快感です。帰り道の清々しさは大好きな感覚です。来年はマスクなしで、抱いたり、キャッキヤと話せますように!」、「大学の舞台も素敵ですが、フェニーチェという大舞台に出させていただき、夢のような気持ちですし、貴重な経験でした。また、学生の方々の最高のパフォーマンスにも感動しました」、「今年はやりたいかと思っていたところ、チャンスももらい、みんなの努力と協力で実施できたことがまず本当に素晴らしかった。練習時間がとても少ないのがわかっていた中、確実に作り上げられる内容を考えてくださった先生方にとっても感謝します。今回は短い中、とても集中して頑張れたと思います」、「当日初めて舞台や観客席を見た時、あまりの素晴らしさに目や口が丸くなったまま見渡しました。こんな素敵などころでできることにワクワクしました」。これらの記述に見られるように、「フェニーチェ堺(堺市民芸術文化ホール)」という舞台で踊れたことに対する喜びを記し

た記述が、シニア 25 人中 13 人に見られた。フェニーチェ堺は 2019 年秋にグランドオープンした南大阪最大級の芸術文化ホールであり、シニアにとっては地元でできた自慢のホールである。そのような舞台に立ったことは、特別で貴重な経験であったことが分かる。

また学生においては、以下の二名の記述に思いが集約されている。「たくさんの偶然が重なり、素晴らしい舞台に立つことができ、本当に嬉しかった。今年の公演はコロナの影響によりリスクが大きい状況だったが、それ以上にみんなの、「ダンス・表現をしたい」、「舞台に立ちたい」という欲求が優っていたと感じた。踊っている間は現実を忘れ、夢中になれる快感があった。また、「公演を絶対に開催したい、中止にしたくない」、「おばちゃん達（シニア）にコロナをうつしたくない」という思いから、日常生活での感染予防も気を引き締めるようになった。あえて全員がマスクをつけて出演したことは、時代に合わせた新しい文化を取り入れており、とても良い案だったと思う。学生シーンの『距離を取れ』は分かりやすく好評だったことも嬉しかった。今すべての人が直面していることをテーマにできたので、お客さんに共感してもらいやすい公演ができたんじゃないかな」、「今回の公演は、半年ほど会えない状態からのスタートであった上に、練習期間も短い状況でした。ですが、私たち同士はもちろん、高齢者の方々とも自粛期間中に、動画配信や手紙などを通して、繋がり続けることができていました。半年間も会えなかったけれど、糸は途切れていなかったから、公演も成功できたんじゃないかと嬉しく感じました。どんな状況でも、繋がり続けることは本当に大切だと思いました。また、今回の公演では、マスクで本番の舞台に立つなど、今まででは考えられない経験がたくさんありました。マスク越しでも、みんなの表情は分かったし、お客さんに伝わったメッセージはたくさんあったと思うし、コロナ禍ならではの表現もたくさん生まれて、一生記憶に深く残る公演だったと思います。コロナの状況でみんなで舞台を創りあげることができて、とても貴重な経験でした。そして、みんなで踊れる幸せを、改めて深く感じることができました」。

これらの記述より、このワークショップ以外で舞

台に立つことが多い学生たちにおいても、コロナ禍での舞台公演は特別な経験であったことが分かる。学生のなかには、既にフェニーチェ堺の舞台で踊った経験を持つ者もあり、フェニーチェ堺での公演という点についてはシニアほどの感想は述べられていない。そのことよりむしろ、このコロナ禍にシニアと一緒に舞台に立てたことの喜びが大きく、今回の公演がとくに印象深い舞台になったことがうかがえた。

また、以下の記述に見られるように、この公演が参加者にとって、これからどのようにコロナの時代を生きていくのかを考えるきっかけとなっていたことが推察される。

「公演をする＝コロナとともに生きていく決意をしたような感じだった。公演をやるとなったからには、たくさんの対策や工夫が必要になり、〈with コロナ〉とは実際にどういうことなのかを考えるきっかけになった。動かないと、やらないと始まらないと思った」

「自身の日常生活でもさまざまなことが制約される中で、今回の舞台は、〈with コロナ〉の可能性を強く考えさせてくれた舞台だった。舞台の表現にもあったように、コロナをただ怖がり何もしないのではなく、正しく理解して行動することで new normal が生まれ、より良い社会になるのではと考えた」。新型コロナウイルス感染症をあえてテーマに取り上げ、感染症が拡大した社会の現実に向け、表 6 に示す多様な視点からダンス創作に取り組んだことで、学生たちは自身の周囲で起こっている様々な問題を身近に感じ考えることができたであろう。

5. まとめ

本稿では、外出自粛期間における非対面型活動と、対面による短い活動期間の結果としての舞台公演が、参加者（高齢者と学生）にとってどのような意味を持っていたかについて、質問紙調査をもとに検討した。

調査結果より、今回のような短期間でも舞台上演が可能となったのは、舞台スタッフや出演者一人ひとりを支えた周囲の人々の存在はもとより、活動自粛期間において発信し続けた非対面型の活動が、これまでの関係性の基盤をより強固なものにしたため

と考えられる。『みんなで踊ろう』は、シニアも学生も少しずつ入れ替わりながら10年間、活動を重ねて来た。その中で培われてきた参加者同士の関係性は信頼に足るものであるが、約6ヶ月という長期にわたる活動休止や活動制限は、これまでに経験したことのない事態であった。そのような中で、模索しながらも動画を配信したりメッセージを送り合ったり、手紙を出したりして交流を続けたことが、結果として、それぞれの関係性を強め、後の対面での活動において大きな信頼となってシニアの不安を打ち消すことにつながっていた。

活動自粛の間に溜まっていたストレスや不安が舞台発表という身体を使った表現によって昇華し、それが他者（家族や観客）によって共感・共有され認められたという経験は、シニアと学生の承認欲求を満たし、自信を導くものであったと考える。

今後もしばらくの間、このような活動自粛期間が繰り返し発生するのであれば、今回の活動と公演の実施によって築いた参加者同士の関係性をさらに強め、離れていてもそれぞれから自由な表現を引き出すための実践と方法論を模索することが次の課題である。

注

- 1) 本稿では以降、一般の高齢者のことを「高齢者」、「みんなで踊ろう」に参加している高齢者のことを「シニア」と表記する。
- 2) 7月11日（土）に行われた教室でのワーク中に参加者が発言したコメントから抜粋。
- 3) 動画を配信した後、グループLINEでシニアから送られてきたメッセージから抜粋。

引用・参考文献

- 鯨岡俊（1997）『原初的コミュニケーションの諸相』、ミネルヴァ書房、p. 130.
- 原田純子（2020a）『舞台公演の経験が高齢者にもたらすものとその課題：地域連携事業「みんなで踊ろう」ダンス・ワークショップを事例として』、人間健康学研究13、pp. 112-121.
- 原田純子（2020b）『コロナの時代の“つながり”を考える』、女子体育62（6・7）、pp. 12-15.
- マズロー、A. H. / 小口忠彦訳（1989）『人間性の心理学モチベーションとパーソナリティ』、産業能率大学出版

部、pp. 68-72.

【参考資料：感染予防対策について】

〈対面でのワークにおける感染予防対策〉

アリーナの入り口にアルコールを設置し、受付ではシニアの出席を確認しつつ、検温を実施した。参加者は活動中もマスクを着用し、マスクの着用が困難な障害者はフェイスシールドを装着した。ワークの初めに行う身体ほぐしは、例年は円形になり顔を見合わせながら行っていたが、今年度は除菌したヨガマットをソーシャルディスタンスをとって並べ、全員が一方向を向いて行った。声を出すワークや、ペアになって手を繋いだり身体に触れ合ったりするワークは、感染防止の観点から実施しなかった。また、サポート学生は公演10日前から当日の朝まで、体調管理チェックシートに朝晩の体温と体調について記録を残した。



〈公演当日における感染予防対策〉

例年の公演当日は、出演者は午前中に集合し、場当たりやリハーサルの合間に楽屋で昼食をとっていたが、複数人での食事は感染リスクが高いことから、今年は楽屋で食事をとらないよう、シニアの集合時間を午後に変更した。舞台の袖では出番を待つ出演者が密にならないよう、等間隔にパイプ椅子を並べた待機スペースを設けた。ホール側より、ディスタンスを保って舞台上に上がることができる人数は最大40名との指示があり、エンディングを含む全ての作品で、一度に40名以上が舞台にあがらないよう構成した。出演者やスタッフ、観客など会場に入る全ての人にマスクの着用を依頼し、シニアと学生が共演する『君と2020』では、本番の舞台上でもマスクを着用した。

観客は整理券を持っている人のみ入場可とし、半券には緊急連絡用の氏名や連絡先を記載することを必須とした。例年は会場スタッフが行っていた整理券のめぐりやプログラムの配布は、スタッフと観客の接触を減らすため観客自身に行ってもらおうよう促した。プログラムには「安全な鑑賞・上演のために皆様へのお願い」（資料2）として、イラストを用いた分かりやすい感染防止の注意書きを添えた。また、観客席は観客同

士の距離をとるため、利用できる座席を限定し、それ以外の座席には使用禁止の用紙を貼った(資料3)。終

演後は座席のブロックごとに分かれて退場するようアナウンスし、出演者と観客の面会は禁止した。



資料2



資料3

The Meaning of Inclusive Dance amidst the Spread of COVID-19 — A Case Study of the “Dance for Everyone” Workshop —

Hana CHONO, Junko HARADA

Abstract

This paper discusses the significance for elderly/student participants in creating a stage performance during the period of the voluntary stay-at-home request issued by the Japanese government due to the COVID-19 pandemic.

The workshop “Dance for Everyone,” which had been suspended for nearly six months because of COVID-19, restarted in a non-face-to-face manner by exchanging videos and messages through SNS. According to the survey, this activity was received well by the majority of the elderly members, who enjoyed the sense of togetherness by talking and dancing online.

Regarding the subsequent face-to-face workshop, while the students were concerned about the risk of infection, the elderly were not very concerned about getting infected. This may be attributed to their experience during the previous non-face-to-face session, which served to ease stress and to keep up and even strengthen their confidence in the other members and in the workshop as a whole.

Keyword: dance, the elderly, stage performance, non-face-to-face activity, COVID-19

